

## 点から線、そして面へ(2)

飯塚 義幸

新大阪駅からJR福知山線特急で約1時間、兵庫県篠山市は周囲を丹波の山々に囲まれた人口4万人弱の町である。1609年に徳川家康によって築かれた篠山城の城下町として栄えたが、古来より京都と山陰、播磨を結ぶ交通の要衝に位置しており、その町並みや文化には京都の影響が色濃く残されている。特に、京都への出入り口にあたる河原町付近は、今でも格子扉やむしこ窓といった京町家の特徴を有する商家が多く建ち並び、当該地域は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

「篠山城下町ホテルNIPPONIA(ニッポニア)」は、この篠山市にあるホテルであるが、古民家を改装した5つの宿泊棟が篠山城跡を取り囲むように離れて点在しているところにその特徴がある。このような形態が取れるのも関西圏国家戦略特区の特区事業(旅館業法に定めるフロント設置義務の緩和)に認定され、フロントを一つの棟に集約することが可能となったためであるが、宿泊客はフロント棟でチェックインした後、町中を歩いて宿泊棟まで向かうことになる。もちろん、希望すれば車で送迎するものの「大部分のお客様は歩かれる」とのことである。

宿泊客は宿泊棟に着いた後も、町中を自由に訪れ、工芸品や雑貨のお店、レストラン・カフェ等に滞在、消費することで、その町の文化や雰囲気までも感じ取ることができる。もちろん、宿泊棟は元「住居」なのだから、町との接続性や開放性については何の問題もない。いわば、道路を廊下と見立て、「点」としての宿泊棟やお店を「徒歩」で繋ぐことで、ホテルという概念を「面」としての町全体にまで広げようとしているのである。

さて、次は「点」と「点」を「自転車」で繋ぐ奈良県の取り組みである。ご承知の通り、奈良県は世界遺産を始めとする数多くの観光資源を抱えるものの、その観光スポットは県内一円に広く分布しており、観光に際しての交通の便は必ずしも良くない。そこで、奈良県は平成22年12月に、自転車による広域的な周遊観光を促す環境づくりを推進するため、「奈良県自転車利用促進計画」を策定した。

これにより、全31ルート、全長約600kmに及ぶサイクリングルートの設定や、案内誘導・注意喚起サインの設置、サイクリング拠点の整備、各種サイクリングイベントの開催、サイクリングマップの作成、レンタサイクルの運営、自転車利用者へのおもてなしサービスの提供といったハード、ソフト両面に亘る各種の取り組みが行われている。

計画の策定から5年、現在(H28/9時点)では自転車の持ち込みが可能な「サイクリストにやさしい宿」は58件、公共施設・地元商店等が提供する「自転車の休憩所」は136カ所に達している。また、秋の3ヶ月に限り運営されるレンタサイクル「古都りん」の利用台数も平成23年の332台から平成27年は1,067台にまで大きく増加しており、自転車を用いて「点」を「面」に広げる新たな観光スタイルの広がりが見受けられる。

この様に「点」と「点」の間を「徒歩」又は「自転車」の時間(スピード)でゆっくりと繋ぐことで、その道中に寄り道をしたり、思いがけない景色や音、香りに出会ったり、地域の人とふれあったりすることができる。こうして意味のある「実線」で繋がれ、「面」としての広がりを持った地域と時間的・空間的に一体となった体験が、来訪者に新たな驚きや発見、心地良さを感じさせるのではないだろうか。それが購買意欲の高まりや、滞在日数、リピーターの増加を促し、ひいては地域の魅力や集客力、経済波及効果の向上が図られるのである。

但し、このような「体験空間」の質を維持・向上していくためには、地域の景観や文化はもとより、地域住民との係わり合いや、その生活から醸し出される雰囲気まで、一定の統一感を持って保持されなければならない。そのためには、主体となる自治体や民間事業者だけでなく、地域住民も含めた継続的な取り組みが不可欠である。今回の事例を含め、「点」から「線」へ、そして「面」へと広げる各地の取り組みと関係者の努力を今後も注視していきたい。